



# 地獄の辻



川崎ゆきお

「何を見ておられるのですかな」

高橋は老人の声で振り返った。そこに小さな老婆さんが立っている。お爺さんではないと思う。しかし、よく分からない。

「石を見ていました」

そこは道が分岐するY字路。その分岐点にある石を高橋は見ている。

石は横長で大きい。歌碑のように何やら文字が刻まれた跡があるが、全く読めない。

「それは道しるべじゃよ」

「ああ、道標なんですか」

高橋が歩いて来た道は狭く。そこから二つに分かれているのだが、それらの道もまた狭い。昔の道だろう。

「何て書かれてあったのですか？」

小さな老婆は右はH市、左はM市と答える。当然、その道しるべが立った時代には、そんな市も地名もない。

「ここは地獄の辻でな」

来たなあ、と高橋は思った。怪しいものが向こうから出てきたのだから、望んでいたものを手に入ったようなもの。高橋にはそういう趣味があり、今日もその種のことを求めて見知らぬ郊外の町を歩いていた。

石はY字路の尖った三角箇所にあり、その後ろに太い木がある。その下にお堂もあるが、何が祭られているのかは外からは見えない。こういう場所には地蔵さんでもあるのだろう。屋根付きなので、豪華なものだ。と高橋は思ったので、それを聞いてみた。

「閻魔堂じゃよ」

「エンマさんですね。地獄の」

「そうじゃよ。まあ、中に閻魔さんはおらん。この閻魔堂はカラじゃ。何も入ってはおらん」

「どうして、ここが地獄の辻なのですか」

「ここはのう、村の道じゃのうて、街道じゃ。遠いところまで行けるターミナル駅」

「幹線道路のようなものですね。昔の国道のような」

「右へ行っても左へ行っても大きな町へ出る」

「はい」

「あなたが来られ所は山際じゃろ」

「はい、山沿いの駅から、徒歩で都心部へ戻ろうとしていました。あ、全部歩いてじゃないですよ。K電鉄の駅があるはずですから、そちらまで歩こうと」

「その麓の駅は村じゃった。ここは村はずれ。村から他国へ行く街道が、これじゃ」

「なるほど、昔の交易路のようなものですね」

「交易路？」

「シルクロードのような」

「何かよう分からんが、まあ、大昔からあるような古道じゃ。今は住宅地の中に埋まってしまってたがな」

「では、ここから村人が旅立ったのですね。それがどうして地獄の辻なのですか」

問いながら高橋は、もう答えを想像していた。それは村から見ると右へ行こうが左へ行こうが、どちらも地獄のようなものだから、きっとそこから出た呼び名だと。

「ここは地獄と通じておるから、地獄の辻じゃ」

「村外の世界は地獄なのですね」

「何がじゃ？」

「だからH市方面もM市方面も地獄だと」

「いいや」

「違うと？」

「ここから下へ行くのじゃよ」

「では道しるべと閻魔堂は無関係なのですか」

「この道しるべが立ったのは江戸時代の初めの頃で、この地方に残っておる最古のものらしいが、閻魔堂はもっと古い」

「それで、もう閻魔堂もカラになり、営業していないわけですね」

「そうじゃな、昔は閻魔さんの木像があったらしいが、盗まれた」

「どうやって、地獄へ行くのでしょうか。閻魔堂の下に穴があり、そこから地底へ降りて行くとか」

「さあ、それは聞いておらんがな。地獄谷のようなものじゃろ。地獄に繋がっておるわけじゃない。ただ……」

「何ですか」

「閻魔堂で一晩座っておると、地獄へ行って戻ってこれるらしい」

「シャトルバスのようなものですねえ」

「何じゃ、それは」

「セルフものかもしれませんねえ。自分で罪悪を告白し、一人で閻魔裁判会をやるような。その時間が地獄巡りのような……。僕は深夜バスに乗って、眠れないので、昔のことを思い出し、苦しんだことがあります」

「あなたは？」

「え、ただの通りすがりの暇人ですよ」

「いや、私より想像力が豊かじゃ。物語を作っていかれる」

「お婆さんは？」

「私はガイドボランティアでな、ここを見に来る人がいると、すぐに飛び出し、説明するんじやよ。近所の方は飛び出し婆と呼んでおる」

「あ、それはご苦労様です。車に轢かれないように注意してください」

「この説明、満足していただきましたかな」

「はい、おかげで、一人で見ているよりも、色々なことが分かって良かったです」

「はいはい、じゃ、気をつけて行きなされ」

「お婆さん」

「何かな」

「いつもそういう喋り方なのですか」

「ああ、これは演技ですがな」

「はい、ご苦労様です」

了